



読む

古文を読む
徒然草1

名前 年組番

/ 100 点



◆ 次の文章を読んで、問いに答えなさい。

【古文】

高名の木のぼりといひしをのこ、人を掟て、高き木にのぼせて、こずゑを切らせしに、いとあやふく見えしほどは、いふ事もなくて、降る、時に、軒長ばかりに成りて、「あやまちな。心して降りよ」と言葉をかけ侍りしを、「かばかりになりては、飛び降るとも降りなん。如何にかく言ふぞ」と申し侍りしかば、「その事に候ふ。目くるめき、枝あやふきほどは、己が恐れ侍れば申さず。あやまちは、やすき所になりて、必ず仕る事に候ふ」といふ。

あやしき下臈なれども、聖人のいましめになへり。鞠も、難き所を蹴出してのち、やすく思へば、必ず落つと侍るやらん。

(兼好法師「徒然草」より引用)

【現代語訳】

有名な木登りといわれた男が、人を指図して、高い木に登らせて、枝を切らせたときに、とてもあぶなく見えた間は、何も言うことはなく、降りるときに、軒の高さぐらいになって、「しくじるな。注意して降りよ」と言葉をかけましたのを、「このくらいの高さになれば、飛び降りても降りられるだろう。どうしてそのように言うのか」と申しましたところ、「そのことでございます。(人は、高くて) 目が回り、枝があぶない間は、(登っている者) 自身が恐れていますので申しません。しくじりは、簡単な所になって、必ずいたすものでございます」と言う。自分の低い者だが、聖人の教えに合致している。蹴鞠でも、難しい所を蹴り上げた後に、簡単だと思うと、必ず落としてしまふとか申すようです。

1 「をのこ」、「こずゑ」、「あやふく」を現代仮名遣いに直して、すべてひらがなで書きなさい。(各20点×5)

- A (おのこ) ● 「を」「ゑ」は、「お」「え」に改める。語頭と複合語以外の八行はワ行に改める。
B (こずゑ)
C (あやつく)

※ひらがなでないものは不可。

2 「あやまちな。心して降りよ」は、だれの言った言葉ですか。【古文】中から十四字で書きぬきなさい。

高	名	の	木	の	ぼ	り	と
い	ひ	し	を	の	こ		

【現代語訳】ではなく、【古文】中から書きぬくように注意する。

- 3 筆者は、どのような考えを指して「聖人のいましめになへり」と言ったのですか。当てはまるものを次から一つ選び、その記号を書きなさい。(イ)
- ア 他人の注意を聞かない人間は事故を起こすという考え。
- イ 事故は何でもないと思える所でこそ起こるという考え。
- ウ 自分が自信のない所になると事故を起こすという考え。
- エ 事故はどんな場所でもいつでも起こりうるという考え。



読む 古文を読む
徒然草2

名前 年組番

/ 100 点



◆次の文章を読んで、問いに答えなさい。

【古文】

仁和寺にある法師、年寄るまで石清水を拝まざりければ、心うく覚えて、あるとき思ひ立ちて、ただ一人、徒歩より詣でけり。極楽寺・高良などを拝みて、かばかりと心得て帰りにけり。

さて、かたへの人にあひて、「年ごろ思ひつること、果たしはべりぬ。聞きしにも過ぎて尊くこそおはしけれ。そも、参りたる人ごとに山へ登りしは、何事かありけん、ゆかしかりしかど、神へ参るこそ本意なれと思ひて、山までは見ず。」とぞ言ひける。

少しのことにも、先達はあらまほしきことなり。
(兼好法師「徒然草」より引用)

【現代語訳】

仁和寺にいたある法師が、年を取るまで石清水八幡宮を拝んだことがなかったので、残念に思つて、あるとき思い立って、ただ一人で、徒歩で参詣した。極楽寺や高良社などを拝んで、これだけだと思ひ込んで帰ってしまった。

そして、仲間に向かって、「長年願つていたことを、果たしました。(話に)聞いていたのにも勝つて尊くいらつしました。それにしても、参詣した人がみんな山に登っていたのは、何事があったのか、知リたかったけれども、神に参詣することが本来の目的なのだと思つて、山(の上)までは見ていません。」と言つたのだった。

少しのことにも、指導者がいてほしいものである。

1 「かばかりと心得て」とありますが、このときの法師の考えとして、当てはまるものを次から一つ選び、その記号を書きなさい。(イ)

ア 石清水を全部参詣することは無理だ。

イ 石清水をすべて参詣した。

ウ 石清水である極楽寺を拝めたので満足だ。

エ 拝んだのが石清水かどうか自信はない。

2 「年ごろ思ひつること」とありますが、法師はどんなことを長年願つていたのですか。

(例) 石清水八幡宮に参詣すること。

※「石清水を拝むこと。」など同趣旨可。

3 「参りたる人ごとに山へ登りし」とありますが、参詣した人がみんな山に登っていたのはなぜですか。

(例) 石清水八幡宮は山の上にあったから。

※「山の上にある石清水に参詣するため。」など同趣旨可。

4 「ゆかしかりしかど」とありますが、このとき法師はどうしたと思つたのですか。当てはまるものを次から一つ選び、その記号を書きなさい。(ウ)

ア 話したい イ 見たい
ウ 知りたい エ 行きたい

●線④に当たる部分を「現代語訳」の中から探すと、「知リたかったけれども」とある。

5 この文章から導かれる教訓が述べられている一文を【古文】中から探し、初めの五字を書きなさい。

少 しの こと

●教訓は、最後の一文に書かれている。



読む

古文を読む
枕草子1

名前 年 組 番

/ 100 点



◆次の文章を読んで、問いに答えなさい。

【古文】

① 春はあけぼの。やうやう白くなりゆく山際、少し明かりて、紫だちたる雲の細くたなびきたる。夏は夜。月のころはさらなり、闇もなほ、蛍の多く飛びちがひたる。また、ただ一つ二つなど、ほのかにうち光りて行くもをかし、雨など降るもをかし。

(清少納言「枕草子」より引用)

【現代語訳】

春は明け方。だんだん白んでゆく山際（の空）が、少し明るくなって、紫がかった雲が細くたなびいている（のが良い）。

夏は夜。月の（明るい）ころは言うまでもない（ことで）、闇（夜のころ）もやはり、蛍がたくさん飛び交っている（のが良い）。また、ただ一つ二つなど、ほのかに光って（飛んで）行くのも趣がある。雨など降るのも趣がある。

(各20点×5)

1 「春はあけぼの」とありますが、このあとに省略されている言葉として、当てはまるものを次から一つ選び、その記号を書きなさい。

- ア がつらし イ がさびし
ウ がわろし エ がをかし
● 「をかし」とは、趣があるという意味である。

2 「やうやう白くなりゆく山際、少し明かりて」とありますが、これはどんな様子を表していますか。

(例) 夜が明けて、山際の空がだんだん明るくなってきている様子。

※「夜明けで、少しずつ山際の空が明るくなっている様子。」など同趣旨可。

3 「月のころはさらなり」とありますが、これはどういうことですか。

(例) 月の明るいころが良いのは、言うまでもないということ。

※「月の明るいのが良いのは、もちろんだということ。」など同趣旨可。

4 「ほのかにうち光りて行く」とありますが、そうするものは何ですか。次の（ ）に当てはまる言葉を【古文】中から書きぬきなさい。

一つ二つの（ 蛍 ）。

● ほのかに光って飛んで行くのは、その前文にある「蛍」である。

5 この文章は何について述べていますか。次の（ ）に当てはまる言葉を【現代語訳】中から書きぬきなさい。

季節ごとに筆者が（ 趣 ）を感じるものについて。



読む 古文を読む
枕草子2

名前 年 組 番

/ 100 点



◆ 次の文章を読んで、問いに答えなさい。

【古文】

- ① うつくしきもの 瓜にかきたるちこの顔。雀の子の、ねず鳴きするにをどり来る。二つ三つばかりなるちこの、いそぎてはひ来る道に、いとちひさき塵のありけるを目ぎとに見つけて、いとをかしげなるおよびにとらへて、大人などに見せたる、いとうつくし。頭はあまそぎなるちこの、目に髪のおほへるを、かきはやらで、うちかたぶきて物など見たるも、うつくし。
- ② おほきにはあらぬ殿上童の、さうぞきたてられてありくもうつくし。をかしげなるちこの、あからさまにいだきて遊ばしうつくしむほどに、かいつきてねたる、いとらうたし。

殿上童＝貴族の子。作法の見習いのため出仕する。

(清少納言「枕草子」より引用)

【現代語訳】

- ① かわいらしいもの。瓜にかいてある幼児の顔。雀の子が、(人が)ねずみの鳴き声をまねるとちよんちよんと飛びはねてくるの。二つ三つほどの幼児が、急いではつてくる途中に、とても小さいちりがあつたのを目ぎとく見つけて、とてもかわいらしい指にとらえて、大人などに見せたのは、本当にかわいらしい。頭はおかっぱにした幼児が、目に髪がかぶさっているのを(手で)かきのけたりしないで、首をかしげて物などを見ているのも、かわいらしい。
- ② 大きくはない殿上童が、きれいに着飾らせられてゆききするのかわいらしい。かわいらしい幼児が、ほんのちよつと抱いて遊ばせかわいがっている間に、とりすがって寝たのは、たいそう愛らしい。

- ① 「うつくしき」とありますが、これと同じような意味を表している言葉を、②段落中から六字で書きぬきなさい。

を かし げ なる

●【現代語訳】の②段落中から「かわいらしい」という語を探して、【古文】中からその語にあたる語を書きぬく。

- ② 「うちかたぶきて」とありますが、これはだれの行動ですか。当てはまるものを次から一つ選び、その記号を書きなさい。

- ア 瓜にかきたるちこ
イ 二つ三つばかりなるちこ
ウ 頭はあまそぎなるちこ
エ おほきにはあらぬ殿上童

- ③ ①段落で筆者は、「うつくしき」ものをいくつかあげていますか。漢数字で書きなさい。

●「瓜に〜」「雀の子の〜」「二つ三つばかりなる〜」「頭はあまそぎなる〜」の四つである。

- ④ 「いとらうたし」とありますが、筆者はだれがどのようにした様子を、愛らしく感じていますか。次に続けて、現代語で書きなさい。

自分がちよつと抱いて遊ばせかわいがっている間に、

(例) かわいらしい幼児が、とりすがって寝た様子。

※「とりすがって」は「しがみついて」などでも可。

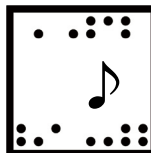
【まちがえやすい】「だれが」「どのようにした様子」の両方書いていなくてはならない。



読む 古文を読む
平家物語 1

名前 年 組 番

/ 100 点



(各20点×5)

◆次の文章を読んで、問いに答えなさい。

一の谷の合戦で敗れた平家は海上に逃れていく。源氏の武將熊谷次郎直実が敵を求めて海岸に行くと、一騎の若武者が沖へ逃れようとしていた。呼び戻して組み合い、いざ討とうとすると、若武者は、わが息子の小次郎と同じ十六歳ぐらいの美少年であった。

【古文】

「そもそまいかなる人にてましまし候ふぞ。名のらせ給へ、助けまらせん」と申せば、「汝はたそ」ととひ給ふ。「物、そのもので候はねども、武蔵国の住人、熊谷次郎直実」となりの申。「さては、なんちにあうては、なのるまじいぞ。なんちがためにはよい敵ぞ。名のらずとも首を取つて人に問へ。見知らうずるぞ」とぞのたまひける。熊谷、「あつぱれ大將軍や。此人一人討ちたてまつたり共、まくべきいくさに勝べきやうもなし。又、討ちたてまつらずとも勝べきいくさにまくる事もよもあらじ。小次郎が薄手負たるをだに、直実は心ぐるしうこそ思ふに、此殿の父、討たれぬと聞いて、いか計かなげき給はんずらん。あはれ、たすけたてまつらばや」と思ひて、うしろをきつと見ければ、土肥・梶原、五十騎ばかりでつゝいたり。土肥・梶原は源氏方の武將。

〔平家物語〕より引用

【現代語訳】

「いったいどのようなお方でいらっしゃいますか。□□、お助け申そう」と申すと、「そなたはだれだ」と問われる。「たいした者ではございませんが、武蔵の国の住人、熊谷次郎直実」と名のり申す。「では、そなたに向かつては名のるまいぞ。そなたにとっては（わたしは）よい敵だ。（わたしが）名のらなくても、首を取つて人に尋ねよ。（顔を）見知っているであろうぞ」とおっしゃった。熊谷は「ああ、立派な大將軍であることよ。この人一人討

ち申し上げたとしても、負けるはずの戦いに勝つはずもない。また討ち申さなくても、勝つはずの戦いに負けることは、まさかないだろう。小次郎が軽い傷を負ったのでさえ、この直実はつらく思うのに、このお方の父は、討たれたと聞いて、どんなにお嘆きなさることだろうか。ああ、お助け申し上げたいものだ」と思つて、後方をさつと見ると、土肥・梶原が五十騎ほどで続いていた。

1

【現代語訳】の□□に当てはまるように「名のらせ給へ」を現代語に改めて書きなさい。

（例）お名のりください

2

「あつぱれ大將軍や」と熊谷が思つたのはなぜですか。当てはまるものを次から二つ選び、その記号を書きなさい。（イ）（エ）

ア 熊谷を立派な武將だとはめているから。

イ いさぎよく討たれようとしているから。

ウ 平家軍の負け戦だと知っているから。

エ 名を言わず、自分を討てば手柄になると言つたから。

オ 自分が討たれることによって、沖にいる味方を助けようとしているから。

3

●線②の前の若武者の言葉から読み取る。

直実が同じ父親としての立場から、若武者の父親の心を思いやっていることが分かる一文を【古文】中から探し、初めの五字を書きぬきなさい。●「どんなにお嘆きなさることだろうか」と父親の心を思いやっている一文を探す。

小次郎が薄

4

「あはれ、たすけたてまつらばや」とありますが、その直実の思いを実現させるのが難しいことを暗示している表現を、【古文】中から二十字以内で探し、初めの五字を書きぬきなさい。（記号も一字と数える。）

土肥・梶原



読む 古文を読む 平家物語2

名前 年 組 番

/ 100 点



◆次の文章を読んで、問いに答えなさい。

那須与一は、平家の船に立てられている扇を射ることを源氏の大將の義経から命じられた。義経の命令に背くことは許されな
い。与一は、扇を射るために海へ乗り出した。

●「祈念した後は「風も少し吹き弱り」とあることから、祈念する前は風が強く吹いていたと考えられる。

【古文】

① 与一、目をふさいで、

「南無八幡大菩薩、我が国の神明、日光の権現、宇都宮、那須の湯泉大明神、願はくはあの扇の真ん中射させてたばせたまへ。これを射損ずるものならば、弓切り折り自害して、人に再び面を向かふべからず。いま一度本国へ迎へんとおぼしめさば、この矢外させたまふな。」
④ と、心の内に祈念して、目を見開いたれば、風も少し吹き弱り、扇も射よげにぞなつたりける。

〔平家物語〕より引用

【現代語訳】

与一は、目を閉じて、
「どうか八幡大菩薩よ、我が故郷の神々、日光の権現、宇都宮大明神、那須の湯泉大明神よ、願わくはあの扇の真ん中を射させてくださいませ。これを射損じるものならば、弓を切り折って自害して、人に二度と顔を合わせるつもりはありません。もう一度郷里に迎えてやろうとお
思いなさいますならば、この矢が外れないようにしてください。」
と、心の内に念じて、目を見開いたところ、風も少し吹くのが弱まり、扇も射やすそうになっていた。

① 「与一、目をふさいで」について答えなさい。(各20点×5)

- (1) このときの状態として当てはまるものを次から一つ選び、その記号を書きなさい。
- ア 風が強く吹いている。
イ 風がすっかり吹きやんでいる。
ウ 風が少し弱くなっている。
エ 波が荒くなっている。

(2) 与一は目をふさいで何をしたのですか。

〔例〕扇の真ん中を射させてくださいと、神に祈った。

※「扇を射させてくださいと、祈った。」など同趣旨可。

② 「射させてたばせたまへ」とありますが、どんな意味ですか。【現代語訳】中から書きぬきなさい。

射させてくださいませ

③ 「いま一度本国へ迎へんとおぼしめさば」とありますが、与一が本国へ迎えられるためにはどうすることが必要ですか。

〔例〕扇を射落とすこと。

※「扇に矢を命中させること。」など同趣旨可。

④ 「目を見開いたれば」とありますが、このときの状況は与一にとってどんな状況になっていましたか。

〔例〕扇を射るのに有利な状況。

※「扇を射やすい状況。」など同趣旨可。

●「どんな状況」という問いには「状況。」で答えるように注意する。



読む 漢文を読む
漢文（論語）

名前 年 組 番

/ 100 点



◆次の文章を読んで、問いに答えなさい。

I

【書き下し文】

子曰はく、「学びて思はざれば則ち罔し。思ひて学ばざれば則ち殆し。」と。

【訓読文】

子曰ハク、
「学ビテ而 不レバ 思ハ 則チ 罔シ。
思ヒテ而 不レバ 学バ 則チ 殆シ。」

（孔子「論語（為政）」より引用）

【現代語訳】

孔子が言う、「書物を読み、学んでも、よく考えなければ、物事の道理をはっきりつかむことができない。それと逆に、いくら考えても、読書をして学ばなければ、独断におちいる危険がある。」と。

孔子Ⅱ紀元前五世紀ごろの中国の思想家。

Ⅱ

【書き下し文】

子曰はく、「己の欲せざるところは、人に施すことなかれ。」と。

【訓読文】

子曰ハク、
「己□ 所□ 不レ 欲セ、
勿レ 施 ス 於 人。」

（孔子「論語（顔淵）」より引用）

【現代語訳】

孔子が言う、「自分がしてもらいたくないことは、人にしてはいけない。」と。

（各20点×5）

1 「思」とありますが、ここでの「思う」とは、どのような意味ですか。【現代語訳】中の言葉を適切な形に直して五字で書きなさい。

よく考える

●終止形に直す。

2 「思ヒテ而 不レバ 学バ 則チ 殆シ」に、書き下し文に合うように、「レ点」を一つ書きなさい。

思ヒテ而 不レバ 学バ 則チ 殆シ

3 Iの文章で孔子が言いたかったことはどのようなことですか。次から一つ選び、その記号を書きなさい。

（エ）

ア 書物を読んで学ぶことが大事なので、じっくり読み返す時間を持つべきである。
イ 自分が考えたことを、書物に書いてまとめておくべきである。

ウ 学ぶことと、考えることは両立できないので、同時に行わないようにすべきである。
エ 学ぶことと、考えることは片方だけ行っても足りないので、両立すべきである。

4 「己□ 所□ 不レ 欲セ」には、□の部分の送りがながぬけています。書き下し文に合うように、送りがなを二か所に書きなさい。

己 所 不 欲

※完答。●「書き下し文」と「訓読文」をていねいに照らし合わせる大切である。

5 「勿レ 施 ス 於 人」に、書き下し文に合うように、「二点」を書きなさい。

勿レ 施 ス 於 人

※完答。



読む 漢文を読む
漢詩（春望）

名前 年 組 番

/ 100 点



（4）は完答、各25点×4

◆ 次の漢詩を読んで、問いに答えなさい。

春望

杜甫

【書き下し文】

国破れて山河在り
城春にして草木深し
時に感じては花にも涙を濺ぎ^①
別れを恨んでは鳥にも心を驚かす^②
烽火三月に連なり
家書万金に抵たる
白頭搔けば更に短く
渾て簪に勝へざらんと欲す

【漢詩】

国破 山河 在
城春 草木 深
感 時 花 濺 涙
恨 別 鳥 驚 心
烽火 連 三 月
家 書 抵 万 金
白 頭 搔 更 短
渾 欲 不 勝 簪

【現代語訳】

国（の都）は破壊されても山や河は（元のま）存在しており、町は春になって草や木が生い茂っている。

時世（のありさま）に（悲しみを）感じては花を見ても涙を流し、（家族との）別れを恨んでは鳥の鳴き声を聞いても心を痛ませる。戦いののろしは三か月間上がり続け、家族からの手紙は大金に相当する（ほど貴重だ）。

白髪になった頭をかきむしると（抜けて）いっそう薄くなり、かんざしさえ全く挿せなくなるうとしている。

1 この漢詩の形式を漢字四字で書きなさい。

五言律詩

●詩の一句が五字から成ることを「五言」、八句から成る詩を「律詩」という。

2 「花にも涙を濺ぎ」とありますが、本来は美しいと感じられる花を見て涙を流すというのと同様の作者の心情が感じられる部分を【書き下し文】中から八字で書きぬきなさい。

鳥にも心 を 驚 か す

3 「家書万金に抵たる」とありますが、どんなことを表していますか。

（例）戦いが続き、家族からの手紙はとても貴重なものになっているということ。

※「家族からの手紙は大金に相当するほど貴重だ」ということ。」など同趣旨可。

●【現代語訳】と照らし合わせて考える。

4 この漢詩の内容の流れに合うように、次のア～エを順に並べかえ、その記号を書きなさい。
ア 作者は自分の老いを嘆いている。
イ 作者の目にふれたままの情景を描いている。
ウ 戦争の終わりが分ならず、作者は家族との別離のつらさを嘆いている。
エ 荒れ果てた春の景色を背景にして、作者は悲しみ、びくびくしている。

（イ）→（エ）→（ウ）→（ア）
※完答。